

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K11879

研究課題名(和文) 多文化ネットワークによる地域活性化とインバウンド観光振興に関する社会学的研究

研究課題名(英文) A Sociological Study of Multicultural Networks for Community Development and International Tourism

研究代表者

本田 量久 (Honda, Kazuhisa)

東海大学・観光学部・教授

研究者番号：90409540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、R.パットナムの社会関係資本論、E.カッツとP.F.ラザースフェルドの「コミュニケーションの二段階の流れ」論、R.フロリダの創造都市論などの議論を踏まえて、越境的多文化ネットワークとその機能(ネットワーク拡大機能、情報伝達機能など)を考察した。糸魚川ネットワークと越境的多文化ネットワークの協働的な実践を事例とし、(1)地域活性化やインバウンド観光振興に向けた実践とその有効性ととも、(2)糸魚川出身の文人・相馬御風や実業家・谷村繁雄を媒介とした、造園家・中根金作、彫刻家・澤田政廣、建築家・村野藤吾によるハイブリッドな文化空間(翡翠園・玉翡翠園・谷村美術館)の構築過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、新たな文化的価値を創出するまちづくりの社会的条件を問い、地域ネットワークと越境的多文化ネットワークによる協働的な実践とその効果を考察する。社会的・文化的・経済的な流動性が高まる今日、人口減少や高齢化に直面する地域コミュニティだけで自己完結的にまちづくりを推進しても、その効果は限定的であろう。糸魚川の地域ネットワークは、スイス人トランスナショナル・ネットワークや領域横断的な文化人ネットワークとの協働的な実践を通じて創造的なまちづくりを推進してきた。本研究は、社会学的に越境的多文化ネットワークの機能を考察し、文化的なまちづくりとその有効性を明らかにする点で学術的・実践的意義がある。

研究成果の概要(英文)：Based upon sociological theories about social capital (R.Putnam), two-step flow of communication model (E.Katz and P.F.Lazarsfeld), and creative city (R.Florida), this research project aims to study transboundary cultural networks and their functions for cultural advancement and tourism promotion in the countryside of Japan. Sociological case studies of collaborative cultural practices by local and transboundary networks in Itoigawa show: first, the functions of their practices for community development and tourism promotion, and second, the construction of hybrid cultural places (Japanese gardens Hisui-en and Gyokusui-en and Tanimura Art Museum) through the collaborative practices by transboundary cultural network of Itoigawa influential figures (Soma Gyofu and Tanimura Shigeo) and distinguished artists in several fields (garden designer Nakane Kinsaku, sculptor Sawada Seiko, and architect Murano Togo).

研究分野：社会学関連

キーワード：越境的多文化ネットワーク トランスナショナル・ネットワーク 社会関係資本 地域活性化 観光まちづくり インバウンド観光振興

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

高度経済成長期、バブル経済期を通じて成長を続けた大都市は、教育や就労の機会を求める多くの若者を吸収し、地方の著しい人口流出を招いた。この結果、全国各地で人口減少が進行し、地域経済が停滞するなど、多くのまちが衰退していった。このような構造的な悪循環を軽減・解消すべく、1990年代以降、地域経済の再建、雇用創出、地域活性化などを目指すべく、多くのまちが観光振興に向けた取り組みを推進した。さらに、グローバルな情報化の進展とともに、国境を越えた人びとの移動が拡大し、産業構造が変容するなど、世界規模の経済活動が成長するなか、日本では、観光立国宣言(2003年)以降、観光振興を目指す動きがさらに加速した。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の発生で外国人観光客が一時的に激減したものの、それ以後、その規模は着実に拡大していき、新型コロナウイルス感染症が世界的に拡大する直前の2019年には年3,000万人に達した。

ただし、広く指摘されるように、多くのまちにおける地域活性化や観光振興の取り組みは、行政主導になりがちで、訪問者の観光ニーズ、地域住民の生活ニーズ、地域経済の実態、まちの都市インフラ、地域特性(文化、歴史、伝統、自然環境、景観、ライフスタイルなど)などを十分に考慮したうえで展開しているとは評価しにくい。実際、多くのまちでは、地域活性化や観光振興に向けた取り組みの成果は限定的なものにとどまっている。

他方、行政、観光協会、文化施設、旅行業従事者、NPO、地域住民などが協働的な活動を通じて地域ネットワークを構築し、さらには地域や国境を越えた多文化ネットワークとともに地域活性化や観光振興を推進しているまちも少なくない。1990年代以降、特定地域において、アジア出身者や日系南米人の定住化が進行し、今日にいたるまで、地方都市でも外国人人口が拡大している。農村的ライフスタイルに魅了されて、農村地域に移住する欧米出身者も現れるようになった。そして、多文化共生まちづくりを推進するとともに、在日外国人の協力を得ながら、観光振興や地域活性化を目指すまちが地方でも増えた。

ただし、越境的多文化ネットワークは、20世紀末のグローバル時代にはじまったことではない。多くの研究者が指摘するように、19世紀以降の移民ネットワークは、連鎖移民を構造化し、その後のトランスナショナルな経済・政治・文化活動を支えてきた(Vertvec 2009=2014)。また、文化人(学者や芸術家など)は、国内外を移動しながら各地で文化活動を展開する過程のなかで、専門分野を超えた領域横断的なネットワークを形成し、それぞれの知識・技能・経験を融合しながら、新たな学術的・文化的・実践的価値を創出してきた。

社会的・文化的実践のモビリティが高まる21世紀こそ、越境的多文化ネットワークは、特定のコミュニティや専門領域に束縛されることなく、多様な人たちの協働的な活動を触発する原動力を創出し、文化的なまちづくりの推進に寄与しうる。人口減少や高齢化が進行するまちにおいては、地域コミュニティだけで地域活性化や観光振興の推進を図ろうと努めても限界がある。今日、地域コミュニティは、越境的多文化ネットワークと連携し、多様な外部者との協働的な実践に通じて文化的なまちづくりを展開することが社会的・文化的・経済的に要請されている。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、地域活性化や観光振興を推進するための社会的条件を問うために、越境的多文化ネットワークの機能とその効果を明らかにする点にある。本研究は、主に糸魚川の地域活性化や観光振興に向けた実践とその効果を調査対象に定め、具体的には、糸魚川の地域ネットワークと越境的多文化ネットワーク(スイス人トランスナショナル・ネットワーク、領域横断的な文化人ネットワーク)による協働的な活動とその機能を考察した。

なお、本研究課題を構想した平成29年度(2017年度)の時点では、糸魚川のインバウンド観光振興を調査対象としていたものの、世界規模の新型コロナウイルス感染症拡大によって、研究計画を調整せざるを得なくなった点についても触れておきたい。平成30年度(2018年度)、平成31年度/令和元年度(2019年度)は、糸魚川とスイス・チューリッヒ州で順調に現地調査を実施し、着実に研究成果を発表していたが、コロナ禍にともなう行動制限によって、令和2年度(2020年度)、令和3年度(2021年度)は、糸魚川やスイスにおける現地調査を中断せざるを得なかった。しかし、令和4年度(2022年度)以降は、行動制限が緩和されたことから、当初の研究計画を修正し、翡翠園、玉翡翠園、谷村美術館の創設に寄与した越境的多文化ネットワークの機能に関する調査を実施した。同時に糸魚川ネットワークやスイス人トランスナショナル・ネットワークの遠隔的な情報伝達機能とその効果を調査するなど、当初の研究目的を拡張し、さらに学術的意義の高い研究を実施することができた。

また、本研究は、学会報告や論文などの公表とともに、研究成果の社会還元を目的としている。糸魚川ネットワーク、スイス人トランスナショナル・ネットワーク、谷村美術館の関係者に研究成果を共有し、糸魚川の地域活性化や観光振興に向けた実践の有効性/課題について議論を重ねてきた。なお、令和6年度(2024年度)は、糸魚川ネットワークが企画するフォーラムに参加し、糸魚川出身の相馬御風や谷村繁雄を拠点とした越境的多文化ネットワークの機能、翡翠園・玉翡翠園・谷村美術館の構築過程、ハイブリッドな文化空間の社会的意義に関する意見交換を

する予定である。

以上のように、コロナ禍によって、研究計画を変更せざるをえなかったが、越境的多文化ネットワークの機能を明らかにし、地域活性化や観光振興に向けた実践の有効性を明らかにするという本研究の目的は一貫させることができた。

3. 研究の方法

本研究は、R. パットナムの社会関係資本論、J. アーリのモビリティ論、E. カッツと P. F. ラザースフェルドの「コミュニケーションの二段階の流れ」論、R. フロリダの創造都市論などの議論を踏まえたうえで、地域活性化や観光振興に向けた実践の有効性を考察した。

パットナムは、イタリアの事例を挙げながら、民主主義や経済発展の条件として社会関係資本 (social capital) の機能に着目した。パットナムによれば、社会関係資本とは「個人間のつながりから生成される社会ネットワーク、互酬性の規範、信頼」(2000: 19) であり、人びとの日常的な市民生活、政治・経済システムの効率的な機能を支える要件である。ただし、文化的な同質性に依拠する伝統的コミュニティのように、結束型社会関係資本に支えられたまちは、確かに強力な連帯感で構成員を団結させるが、閉塞的・排他的・硬直的になりがちであり、新たな変化に適応できず、停滞することになる。特に自由を求める人たちにとっては居心地がよくなり、人口流出の一因になりうる。他方で、境界を越えて多様な人びとがゆるやかなネットワークを形成するまちは、橋渡し型社会関係資本が蓄積し、継続的に「弱いつながり」(Granovetter 1973) を拡張する可能性がある。

このような多様性に関わられたまちは、特定の場所を拠点とする場合もあるが、地域住民にせよ、外部者にせよ、人びとは移動を重ねながら、越境的多文化ネットワークを拡張する。インターネットや SNS の普及によって、だれでも地域プロモーションを展開できる時代になっているが、E. カッツと P. F. ラザースフェルドの「コミュニケーションの二段階の流れ」を踏まえるならば、宣伝活動の効果は直接ターゲットに及び、直線的に人びとの意識や行動を規定するわけではない。このような情報は、多様な人びとがまちの境界線を越えながら形成するネットワークを媒介としつつ、広く伝達されるだろうし、特に影響のある人たち (influentials) 必ずしも有名人に限定されない が提供する情報こそが、家族や友人などの消費行動や余暇活動に一定の効果をもたらす。

このような情報伝達機能を有する越境的多文化ネットワークは、多様な人びとの移動を促進し、地域コミュニティと外部者の相互行為を触発することで、自由で多角的な発想と新たな価値を創出する。R. フロリダによれば、3T (技術 (Technology)、才能 (Talent)、多様性に対する寛容な態度 (Tolerance)) が高い創造都市 (creative city) は、イノベーションが起こりやすい。また、佐々木雅幸ら (2014) は、フロリダの研究を応用して、創造農村の条件とその可能性を議論している。

本研究は、越境的多文化ネットワーク、地域活性化や観光振興に関する社会学的な議論を踏まえたうえで、第 1 に、糸魚川の地域活性化とインバウンド観光振興に向けた糸魚川ネットワークとスイス人トランスナショナル・ネットワークの協働的な実践、第 2 に、谷村美術館の創設に貢献した糸魚川ネットワーク (相馬御風、谷村繁雄) と文化人ネットワーク (澤田政廣、村野藤吾、中根金作) による領域横断的な実践を社会学的に考察した。

前者の糸魚川における地域活性化とインバウンド観光振興に関する研究については、糸魚川とチューリッヒで現地調査を重ね、特に糸魚川ネットワークとスイス人トランスナショナル・ネットワークによる情報伝達や協働的な実践を観察した。また、糸魚川を拠点に地域活性化や観光振興に向けた活動する首都圏在住スイス人のミュラー氏、チューリッヒの日本専門旅行会社 japan-ferien.ch 経営者のコーラ氏と連絡を取り合うとともに、彼らによる SNS 投稿やホームページのコンテンツを分析することで、スイス人ネットワークの情報伝達機能を考察した。

後者については、糸魚川の翡翠園・玉翡翠園・谷村美術館や静岡県熱海市の澤田政廣記念美術館を視察するとともに、これらの文化施設の創設に関わった糸魚川ネットワークと文化人ネットワークに関連する文献資料を収集し、領域横断的に拡張・融合する越境的文化人ネットワークによるハイブリッドな文化空間の構築過程を考察した。

4. 研究成果

コロナ禍以前の糸魚川では、インバウンド観光振興や地域活性化に向けて、行政、観光協会、旅行業従事者、NPO 糸魚川国際人材サポート協会 (IISA)、糸魚川インバウンド推進委員会などが連携するとともに、糸魚川在住の欧米出身者、農村地域の古民家を拠点に活動する首都圏在住スイス人のミュラー氏、チューリッヒで日本専門旅行会社 japan-ferien.ch を経営するコーラ氏をはじめとするスイス人トランスナショナル・ネットワークと協働的な実践を推進した。

糸魚川におけるスイス人トランスナショナル・ネットワークの実践は、2011 年にさかのぼる。この時期の日本ではインバウンド観光が徐々に拡大していたが、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の発生で急減した。福島周辺のみならず、日本全体が危険であるというイメージが拡散したためである。このような状況のなか、日本で留学した経験を持ち、チューリッヒの日系企業で勤務していたコーラ氏は、2011 年 7 年に石巻市でがれき撤去ボランティアに参加したあと、スイス人に日本の安全性を訴えるために、8 月に宗谷岬を出発し、12 月に佐多岬まで歩いて旅した。さらに、この道中でコーラ氏とミュラー氏は連絡を取り合い、10 月には、その中間地

点である糸魚川で合流し、米田徹・糸魚川市長と会談するとともに、インバウンド観光振興に向けたプロジェクトに向けて始動した。コーラ氏の日本縦断については、日本やチューリッヒの新聞などでたびたび報道されたことから、多くの訪日外国人観光客が利用する日本旅行専門サイト japan-guide.com を創設したスイス人ステファン・シャウエッカー氏にも知られる存在となった。コーラ氏の日本縦断が終わったあと、ミュラー氏、コーラ氏、シャウエッカー氏は東京で集まり、今後の活動を話し合った（シャウエッカー 2014）。2013年と2015年には、観光庁、スイス大使館、じゃらんなどの民間企業、糸魚川をはじめとする全国各地の地域ネットワークから協力を得て開催された We Love Japan Tour は、このスイス人トランスナショナル・ネットワークの実践による成果であった。

翌年 2012 年には、日本縦断が評価されて、溝畑宏・観光庁長官から感謝状を受けるとともに、米田徹・スイス人映画監督とともに日本縦断のドキュメンタリー映画「negative: nothing - Step by Step for Japan」を制作し、チューリッヒなどで上映された。また日本縦断の過程で、コーラ氏は全国各地でネットワークを拡張し、チューリッヒで日本専門旅行会社 japan-ferien.ch を創設するための経営基盤を構築した。その後も、上述した We Love Japan Tour の開催などを通じて、スイス人トランスナショナル・ネットワークを強化するとともに、糸魚川をはじめとする全国各地の地域ネットワークと連携しながら、日本各地にスイス人観光客を送り出し続けた。コーラ氏は、常にミュラー氏や糸魚川ネットワークと連絡を取り合う一方で、毎年日本を訪れ、糸魚川でも各地を巡りながら越境的多文化ネットワークの維持・拡大に努め、糸魚川のインバウンド観光振興に貢献した。

2020 年以降は、コロナ禍によって、糸魚川の観光振興に向けたコーラ氏とミュラー氏の実践は中断を余儀なくされたものの、チューリッヒで日本文化（特に日本食や日本酒）のプロモーションに努めながら、日本観光に対するスイス人の関心を維持・向上させる活動を継続している。2020 年以降のスイス人トランスナショナル・ネットワークと糸魚川ネットワークによる協働的な実践についても情報を得ているが、今後の研究課題としたい。

以上のように、限定的ではあるけれども、糸魚川のインバウンド観光振興や地域活性化に向けた越境的多文化ネットワークの機能を明らかにした。この研究成果を踏まえたうえで、令和 4 年度（2022 年度）以降は、日本国内の越境的多文化ネットワークに着目しながら、糸魚川の文化施設である翡翠園（1978 年）、玉翠園（1981 年）、谷村美術館（1983 年）が創設された過程を調査した。

糸魚川の文人・相馬御風（1883～1950 年）は、時空を超えて多くの文化人に影響を与えた人物である。早稲田大学に進学する 1902 年から 1916 年まで東京を拠点として、坪内逍遙、島村抱月、中山晋平をはじめとする多くの文化人とともに幅広い文化活動を展開した。糸魚川に退住する 1916 年以降も、北大路魯山人、會津八一、後述する澤田政廣といった文化人が自宅を訪れ、交流を重ねた。

もう一人、糸魚川の著名人として、実業家・谷村繁雄（1916～1986 年）を挙げることができる。谷村繁雄は、造園家・中根金作（1917～1995 年、磐田出身）、彫刻家・澤田政廣（1894～1988 年、熱海出身）、彫刻家・村野藤吾（1891～1984 年、唐津出身）に協力を要請し、翡翠園、玉翠園、谷村美術館を創設するなど、越境的多文化ネットワークの結節点（ハブ）であったと言える。これらのハイブリッドな文化空間の構築過程をみてみたい。

谷村繁雄は、翡翠園と玉翠園をつくるために、まずは足立美術館（島根県）を創設した実業家・足立全康に助言を求めた。足立美術館の日本庭園を造園したのが中根金作であることを聞くと、その足で面識のなかった中根金作の事務所（京都）に向かって直接交渉し、造園を依頼できることになった。

これに続き、谷村繁雄は、玉翠園の横に谷村美術館の創設を構想し、彫刻家・澤田政廣に協力を求めた。澤田政廣は、1923 年の関東大震災で、東京から熱海に帰郷しようとしたが、東海道線が不通になったことから、糸魚川にある弟子・石塚裕康の実家に数日滞留し、このときに、先述した相馬御風と出会っている。澤田政廣は、相馬御風との縁と糸魚川への愛着を理由に谷村美術館の創設に協力することを約束した。もし相馬御風と澤田政廣がその後も交流を続けていなかったら、谷村美術館の構想は大きく異なっただけである。

さらに、澤田政廣は、谷村美術館の設計を旧知の友人である建築家・村野藤吾に依頼するという提案をしたところ、谷村繁雄は承諾し、村野藤吾の協力を得られることになった。村野藤吾は、シルクロードの岩窟遺跡をイメージし、澤田政廣の作品を一つひとつ展示する「洞窟」を設計した。美術館のなかには、非直線的だが鑑賞者を誘導するかのよう「洞窟」が配置されている。また、自然光を取り入れることで時間・季節・鑑賞者の気分などによって、館内の雰囲気や作品のイメージは異なってくる。村野藤吾と澤田政廣は実際に何度か現場を訪れ、細かく空間設計を調整している。このような全体的に調和された静寂の空間は、村野藤吾と澤田政廣の合作であると言えるだろう。

本研究は、相馬御風と谷村繁雄を拠点に形成された領域横断的な文化人ネットワークの協働的な実践によって、翡翠園、玉翠園、谷村美術館というハイブリッドな文化空間が構築された過程を明らかにした。翡翠園、玉翠園、谷村美術館は、糸魚川における観光振興や地域活性化を推進するうえで重要な文化財であり、文化人のみならず、地域住民や観光客が集まるサードプレイスの空間としての価値もある。これらの文化空間がもたらす文化的・社会的・経済的効果に関するより詳細な考察は、今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 本田量久 | 4. 巻 65 |
| 2. 論文標題 スイス人ネットワークと農山村地域における観光振興/まちづくり | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 応用社会学研究 | 6. 最初と最後の頁 49-62 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00022722 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 本田量久 | 4. 巻 66 |
| 2. 論文標題 越境的な文化人ネットワークとその機能 糸魚川におけるハイブリッドな文化空間の形成 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 応用社会学研究 | 6. 最初と最後の頁 243-259 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/0002000674 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 本田量久 |
| 2. 発表標題 観光振興に伴う地域コミュニティの変容 |
| 3. 学会等名 日本社会学理論学会 第14回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 HONDA Kazuhisa |
| 2. 発表標題 Glocalization for International Tourism in the Countryside of Japan |
| 3. 学会等名 Experience and Prospects of Cooperation between Russia and Japan (Far Eastern Federal University, Vladivostok) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 本田量久・藤田玲子 |
| 2. 発表標題 創造農村と社会関係資本に関する社会学的考察 |
| 3. 学会等名 日本観光研究学会 第34回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Honda Kazuhisa |
| 2. 発表標題 Global Network and International Tourism in Itoigawa, Niigata |
| 3. 学会等名 The 24th Annual Conference of Asia Pacific Tourism Association (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Honda Kazuhisa |
| 2. 発表標題 Swiss Transnational Networks for Tourism in the Countryside of Japan |
| 3. 学会等名 The 1st Conference of Rikkyo Sociological Association (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Reiko Fujita |
| 2. 発表標題 Toward a Framework for Lowering the Language Barrier at Local Tourism Destinations in Japan |
| 3. 学会等名 The 24th Annual Conference of Asia Pacific Tourism Association (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 藤田玲子・本田量久 |
| 2. 発表標題 高齢化する観光地における外部者の活動実践とその意義 地域活性化を担う人材育成に向けた示唆 |
| 3. 学会等名 日本観光ホスピタリティ教育学会 |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 山川 和彦 編著 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 くろしお出版 | 5. 総ページ数 232 |
| 3. 書名 観光言語を考える（藤田玲子・本田量久「観光地における言語対応 まちなかの取り組み」） | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 H. Terauchi, J. Noguchi, and A. Tajino eds. | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 Routledge | 5. 総ページ数 226 |
| 3. 書名 Towards a New Paradigm for English Language Teaching: English for Specific Purposes in Asia and beyond (Fujita Reiko, "English for Tourism and Hospitality") | |

| | |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 藤田玲子・加藤好崇 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 研究社 | 5. 総ページ数 220 |
| 3. 書名 やさしい日本語とやさしい英語でおもてなし | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap
https://researchmap.jp/kazuhisa_honda

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|-------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 藤田 玲子 (Fujita Reiko) (90366930) | 成蹊大学・経営学部・教授 (32629) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|